

内村鑑三 闘いの軌跡(九)

A Critical Biography of UCHIMURA Kanzo (Part 9)

関口 安義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

第九章 鉱毒事件、反戦論と聖書講義

一 足尾鉱毒事件

川俣事件

前章で述べたように、一九〇〇(明治三三)年という年は、内村鑑三にとって波乱に富んだ年であった。七月に内紛から『東京独立雑誌』の廃刊があり、九月には、前年引き受けたばかりの女子独立学校の校長を、これまた内紛で辞めねばならぬ羽目に追い込まれている。七月に第一回夏期講演会を始めた時、鑑三は数え四十歳になつていた。論語で言う「四十而不惑」の歳である。が、「不惑」

どころか、彼にはさまざまな課題から来る悩みがあった。彼はそれらに誠実に向かい合う。

そうした中で十月に、前章で詳しく述べた雑誌『聖書之研究』の創刊というライフワークとも言える大事業が始まる。この事業の成功によって、鑑三は京都時代の極度の貧しさからは、ひとまず抜け出す。妻と子ども二人(ルツと祐之)もおり、家庭的には恵まれた日々を彼は過ごしていた。が、その闘争心は事があると火を噴く。

その一つは、足尾銅山鉱毒事件への強い反応であった。足尾鉱毒事件というのは、京都生まれの古河市兵衛が経営していた栃木県上野原郡足尾町の足尾銅山から流出した鉱毒が、下野郡谷中村をはじめ、渡良瀬川流域の広大な農地を汚染し、一大社会問題化した公害事件を指す。事件は江戸時代に掘り尽くして、もはや廃鉱同然の足尾銅山を古河市兵衛が買収したにはじまる。古河は開発第一主

義を掲げ、新鉱脈が発見されるに及び、坑内外の近代化を行い、大増産を図った。が、精錬のために生じる亜硫酸ガスの放出によって、足尾銅山周辺の山林は枯れ、禿げ山が出現、川では魚の大量死、さらに田圃では稲の立ち枯れという被害が生じた。これは近代日本で最初に生じた一大公害事件であった。

足尾鉱毒の被害は、一八八〇年代にすでにはじまっていた。それは渡良瀬川の魚類の大量死に現れる。さらに度重なる洪水は、汚染された水が周辺の土地を不毛化し、農作物は育たず、住民に大きな被害を与えるようになる。被害地の農民は団結し、警官隊と衝突を繰り返しながら上京し、国に請願を乞うようになる。一九〇〇(明治三三)年一月十三日の第四回大挙動員による上京請願は、警官隊との大衝突を招き、百数十人が検挙され、六十八名が起訴投獄されるという事態を招く。これは国家権力の農民に対する大弾圧で、群馬県邑楽郡佐貫村川俣(現、明和町)で起こったことから川俣事件とよばれた。

栃木三区選出の衆議院議員田中正造は、一八九一(明治二四)年鉱毒の害を視察調査し、第二回帝国議会で、この問題に関する質問を行い、一八九六(明治二九)年にも国会で質問し、群馬県邑楽郡渡瀬村(現、館林市)の雲龍寺で公害反対演説を行う。この頃には鉱毒問題に取り組むことを誓った町村の数は、栃木・群馬両県を合わせて四十近くになっていた。農民の国会請願は、「鉱毒の被害地をもとに戻す」にはじまり、「税を軽くする」「銅山付近の木を切ることをやめ、水源地を守る」「渡良瀬川の堤防を直す」など、さまざまな内容に渡っていたものの、最後の願いは、足尾銅山の鉱業停止にあった。

一八九七(明治三〇)年二月、田中正造は十八項目にわたる質問書を提出する。そこで彼は、堤防を守る渡良瀬川の竹が鉱毒で枯れていることや、被害を受けた各種農作物を議場に示し、鉱毒のすさまじさを質問書に基づいて演説する。が、時の政府は言を左右にして、真つ当な返事をしなかった。「押し出し」という、今日のデモに相当する請願行動が生まれたのは、こうした背景があった。それが右の川俣事件を生んだのである。

正造の亡国演説と鑑三

川俣事件の折、国会は開会中であった。事件を知った田中正造は、即刻政府の責任を質すことになる。正造が提出した質問書、「亡国に至るを知らざれば之即ち亡国の儀につき」には、「民ヲ殺スハ国家ヲ殺スナリ／法ヲ蔑ニスルハ国家ヲ蔑ニスルナリ」の文面もあった。これは今日「亡国演説」として知られるものだ。が、時の政府は、すでに銅山対策として予防工事を発したので、問題は解決済みとして真剣に考えようとしなかった。

ここで足尾銅山鉱毒事件に正面から対峙した田中正造の生涯と議会での闘いについて書いた文献をいくつか紹介するなら、まず、島田宗三『田中正造翁余録』(上・下)が詳しく、必読文献と言えよう。それに寄り添う形で書かれたコンパクトな新書判の林竹二『田中正造の生涯』²⁾は、田中正造と谷中村問題を考えるのに非常に役立つ。また、由井正臣『田中正造』³⁾、小松 裕『田中正造 未来を紡ぐ思想』⁴⁾も挙げておいてよいだろう。

さて、内村鑑三は『東京独立雑誌』廃刊後、生活のためもあって、萬朝報社に客員として再入社していた。彼は『萬朝報』の英文欄主

筆の時代に足尾鉍毒問題を論じており(一八九七・三・二六)、鉍毒事件には並々ならぬ関心を懐いていた。また、一九〇一(明治三四)年四月二十一日に、巖本善治・木下尚江らと栃木県の足利教会内に設立された友愛義団に招かれて、市内の末広座で行われた社会改良演説会で「社会改良の両面」と題した講演を行った。その翌日には、はじめて公害地を訪れ、被害のすさまじさを知る。東京に戻るや鑑三は、『萬朝報』に「鉍毒地巡遊記」と題した文章を連載(一九〇一・四・二五(三〇)する)。

鑑三は若き日、札幌農学校で農学を修め、土壌学などにも詳しい知識を持っていた。彼は自然科学者でもあった。この事実を抜きにして、鑑三と足尾鉍毒事件を論じることができない。鉍毒地巡視の折にはそれが生きた。右の文章で鑑三は言う。「余は農学を修めて茲に二十有余年、未だ曾て殊更に之を修めし利益を感ぜし事なし、然れども此日農学は余に善き用を務たり、若し余が土壌学を学ばざりしならば余も多くの被害地巡視者と同じく被害の激度を知ること能はざりしならん」と。鑑三はここにも神の摂理を感じていたかのようにある。

彼は札幌農学校に学び、キリスト教を信じ、教会建設にまで至ったことを神の摂理と感じ、それをしばしば口にし、また『余はいかにしてキリスト信徒となりしかわが日記より』をはじめとする著作物にも書いてきた。足尾鉍毒事件に際しては、札幌農学校での学問もまた神の摂理のもとにあったことを感じ取っているのである。右の文章の続きには、次のようにある。土壌学を学び、『地理学考』(のち『地人論』と改題)を書いた内村鑑三の面目躍如といふべきか。引用しよう。

渡良瀬川沿岸の地は埃及国ナイル河沿岸の地の如し、即ち最も沃饒なる沖積層にして、天下之に優るの土壤あるなし、是れ金鉍、銀鉍にも優る宝鉍なり、金銀寶石こそ産せざれ、之を勤勉なる農夫の手に委ね、之に人為的妨害を加ふることなくば幾千年を経るも尚ほ好良なる穀類を産出して止ざるの無尽蔵なり。

このような恵みの土地を、金儲けのため蹂躪するとは何事か、と鑑三は問う。彼の怒りは、「被害激甚地」の現状を見て極点に達する。彼は「鉍毒地巡遊記」の結びで、「足尾銅山鉍毒事件は大日本帝国の大汚点なり」とまで言う。鑑三の足尾銅山鉍毒事件との闘いは、ここにピークを迎える。

この年(一九〇一・明治三四)五月二十一日、東京神田の東京基督教青年会館で足尾鉍毒問題について考える会が開かれると、鑑三は三宅雪嶺・徳富蘇峰・安部磯雄らと、田中正造や農民の運動を応援しようとして、「鉍毒調査有志会」を結成、鉍毒問題に取り組みようになる。鑑三らが現地調査をし、この問題に本格的に取り組みるのは、同年六月二十一日からの十日間、再び鉍毒地調査に赴いてからのことである。

現地調査に当たっては、田中正造が案内役を務めた。七月二十日には、鑑三をはじめ黒岩涙香・幸徳秋水・堺利彦・山県五十雄らが発起人となり、理想団が発足する。発会式では「理想団宣言」が議決された。そこには「時勢を憂うる者。来りて相共に社会救済の原動力たるを期せよ」とあった。この後理想団は、各地に支部を結成させることになる。なお、「足尾銅山・鉍毒調査報告第一回」が発

表されるのは、同年十一月二十日のことである。

正造の天皇直訴事件と鑑三

他方、田中正造はその一ヶ月前の十月二十三日、衆議院に辞表を提出、衆議院議員を辞職し、国会を去ってしまう。彼は川俣事件で六十八人もの農民が被告人として裁判にかけられた際には大弁護団を結成して闘い、全員無罪を獲得したものの、いわゆる「あくび事件」を起こす。これは裁判中に検事があくびをしたのを咎めたことから、検事を侮辱したとされ、一ヶ月もの間監獄に送られた事件であった。が、正造はこの一ヶ月の間に聖書を読み、キリストに近づく。聖書は以後、常に彼の机辺にあつて、その思想や行動に、大きな影響を与えることになる。

田中正造が谷中村の鉈毒問題を天皇に直訴するのは、国会議員をやめて一ヶ月あまり経つての一九〇一（明治三四）年十二月十日のことであった。彼は直訴状を持って、午前十一時四十分、第十六議会の開院式から帰途に就いた天皇の馬車に向かい、「お願い申します」と叫びながら、「謹奏」と書いた訴状を差し出そうとした。が、警護の厳重な天皇の行列ゆえ、正造はたちまちその場で、多勢の警官に取り押さえられてしまう。当時は警護は騎兵であり、彼らは馬上から槍をかざして正造をさえぎり、天皇一行の行列は「事もなく通過したという。直訴状は天皇が読むものとの考えで、正造は文章家の幸徳秋水に最終稿を見せ、手入れを頼んだものだった。それを正造は時間ぎりぎりまで、さらに手を入れた。

正造は麹町警察署に連行され、きびしい取調を受ける。けれども、時の政府はこの天皇直訴問題の処理に困り、「狂人」として、彼を

釈放する。直訴はご法度であった。彼は死を賭して行動に走つたのである。正造はその日の夜八時二十分まで取調を受け、釈放された。内村鑑三は正造を、東京での宿舎である越中屋に見舞っている。

鑑三には義理難い面がある。人が見捨てても彼は見捨てない。これ以前にも、鑑三は友人田村直臣が『日本の花嫁』事件⁶で、日本基督教大会から戒規（譴責処分）を受け、「教師の職に適せず」という動議が可決され、日本基督教教会職（牧師）の身分を剥奪されるという事件が生じた時、直ちに「豈惟り田村氏のみならんや」を『国民之友』（第一五巻三三三号、一八九四・七・一三）に投稿（時事欄）、田村を援護した。このことはすでに何度も触れたところだ。彼は失意の田村をその自宅に見舞つた唯一の友でもあった。また後年、かつて不敬事件の折に彼を支えた牧師横井時雄が代議士となり、日本製糖汚職事件で拘禁され、東京控訴院第一部で、重禁固五ヶ月、追徴金二五〇〇円という有罪判決を言い渡された時も横井を見放さず、精神的支援を忘れなかった。

斎藤宗次郎・鑑三門下生となる

前後するが、足尾鉈毒問題が鑑三の頭を大きく支配しはじめた頃、彼は盛岡の一青年斎藤宗次郎とはじめて出会った。時と所を正確に記すならば、一九〇一（明治三四）年十月二十七日午前十時、盛岡駅前清風館という旅館の二階であった。斎藤の著『恩師言内村鑑三言行録』⁶の弟子による』にそのことが「先生との初対面」として出てくる。四歳年上の照井眞臣乳も一緒だった。照井は岩手県稗貫郡花巻の里川口尋常小学校（のち花巻尋常高等小学校と改称）の教師で、斎藤宗次郎とは同僚であったこともある。まず、照井につい

て、簡単に触れておこう。

照井眞臣乳は、『東京独立雑誌』とその後身誌の『聖書之研究』の熱心な読者であった。なお、照井はこの少し後に、宮沢賢治の小学校五年生（一九〇七年度）の担任として、賢治にキリスト教や内村鑑三の思想を教えたとされる人物である。『内村鑑三全集39』には、鑑三の照井宛書簡三十通が収録されている。

なお、この照井眞臣乳については、近年の新保祐司『明治の光・内村鑑三』（藤原書店、二〇一八・一）が詳しく、「内村鑑三の『基督教』、いわゆる無教会主義の『基督教』が生んだ弟子たちの中の、一つの典型といってもいいだろう」の評言のあることを言い添えておく。

次に斎藤宗次郎は、一八七七（明治一〇）年二月二十日の生まれで、当時二十五歳。鑑三とは十六歳ほどの歳の差があった。以後彼は、鑑三の忠実な弟子として終始した。花巻では、花巻農学校の教師をしていた宮沢賢治と親交があり「雨ニモマケズ」のモデルとも言われた。先の『恩師言内村鑑三言行録ひとりの弟子による』には、鑑三の私的談話や講演の要約が見られ、口の悪かった鑑三の言説もそのまま記録され、人間内村鑑三を的確に語る面を持つ。折々に差し挟まれた著者自らの描いた挿絵も、その説明と共に参考になる。

斎藤宗次郎には、他に『二荊自序伝』との題名で、四百字詰原稿用紙に自筆で認めた龐大な日記がある。現在は今井館資料館に保存され、そのコピー複製本もここにはあつて、誰でも簡単に閲覧することができる。また、その一部は、近年栗原敦と山折哲雄によって『二荊自叙伝上下』⁷⁾として活字化された。以後、宮沢賢治とキリスト教、賢治と鑑三との関わりなどが、より広く研究者を捉えるようになる。斎藤宗次郎は終生内村鑑三に従った高弟であり、その誠実

な人柄ゆえ、鑑三の信頼も厚かった。鑑三評伝には落とすことが出来ない大事な人物と言えよう。

ポーコ演説と理想団

この年（一九〇一）十二月十二日の夜、東京基督教青年会館で開かれた足尾鉍毒演説会で、鑑三は巖本善治・黒岩涙香（周六・幸徳秋水らと講演をした。これは「ポーコ」演説として知られる。同年十二月十四日付『毎日新聞』が、この演説を次のように報じた。

内村鑑三氏登壇、古河市兵衛に制裁を加へざる可らず、南北戦争以来米国にて行れしポーコを行ふ可し、非奴隷論者は常に奴隷を有せる富豪に尾行して、彼れを見る毎に「彼れは人道を無視し、神を汚かす所の悪人なり」と罵りぬ、是れポーコの法なり、古河に向ても亦宜しく此法を採用し、古河の出入に尾行して、之を罵るも亦妙法ならずや

鑑三の属する『萬朝報』も同年十二月二十日に「当今の弁士」のタイトルで、この夜の講演会を取り上げ、アメリカの青年が奴隷使用者に対し、「ポーコ」と叫んだように、「内村先生は古河市兵衛に対して此ポーコを行へと勧めたのである。それで先生が「誰か諸君の中で此ポーコをやる者はありませんか」と聴衆に問いかけた時、「ある、ある、我輩がやつて見せる」と答へる声が諸処に起つた」と報じた。

翌一九〇二（明治三五）年一月十二日午後二時、鑑三は埼玉県の浦和町（現、さいたま市浦和区）で開催された理想団浦和支部の発会

式に出席、鉅毒事件に關しての演説をした。会場となったのは、中山道沿いの浦和の中心地で、桜の名所として知られる真言宗豊山派の寺院玉蔵院(現存)であった。当時浦和には、大勢の人々を收容する埼玉会館のような建物は、まだなかったたので、寺の境内を借りたのであろう。わたしは浦和には一時住んだこともあるので、この辺の事情はよくわかる。玉蔵院は駅にも近く、人集めには絶好の場所である。鑑三のほか黒岩涙香・幸徳秋水らが出席、聴衆はかなり広い境内に溢れるほどであったという。一月十四日付の『萬朝報』に、その記事が載っている。

続いて、同年四月二日の夕六時から神田の東京基督教青年会館で開かれた鉅毒問題解決講演会にも鑑三は招かれ、木下尚江・巖本善治・島田三郎らと講演を行う。多くの聴衆で、会場は満員であったという。鑑三の講演要旨は、傍聴者の一人が「内村氏の鉅毒問題解決」として『福音新報』に要旨を投稿したものがあり、全集にも収録されている。それによると、鑑三は問題解決には「誠実」「公平」「愛心」の三つが大事だということを説得力豊かに展開したという。最後に投稿者の感想が記され、そこには「内村氏の此演説は非常の拍手、非常の喝采を以て応ぜられ、深く同情同感を惹けり」とある。鑑三の鉅毒問題への関心は、一にその信仰から来る農民への同情心にあった。それゆえ彼は運動にのめり込むに従い、そこにも人間のやり切れない腐敗や悪の問題があるのを知って一線を引かざるを得ないこととなる。当時彼が『萬朝報』に連載(一九〇一・一二・一九―三〇)した「余の従事しつゝある社会改良事業」は、薩長土肥の藩閥政府を否定し、農業を以て「国家民衆を益せんとし」、農学の研究にはじまる自叙伝的回顧録でもある。

蘇峰への訣別の辞

右の自伝的回顧録「余の従事しつゝある社会改良事業」は、鑑三論において余り言及されないものながら、彼が如何にして政治運動を棄て、聖書研究に没頭するようになったかを知るのに重要な手がかりを与える文献としてよいだろう。彼は言う。札幌農学校を卒業し、当初役所に勤めると、「農商務省の役人達に失望」し、辞表を提出する。次に実業をしようとして漁業に赴くが、「日本国の漁夫に失望」する。彼らの捕獲術には嘆賞するものがあつたが、その道德の低いのに驚く。「彼等は唯取て、呑んで、淫して、博奕を打つ丈である」と彼は言い、実業を放棄したと言う。

他方、「教育を以て人を作らん」とすれば、これまた失望する。彼は帰国後新潟の北越学館に勤めるが、外国宣教師との対決が高じ、学校を追われた。その後、東京でのさまざまな教師体験の後、自身はもろろん誰からも適職と思われた第一高等中学校(のちの第一高等学校)の嘱託教師(現在の専任講師)となるが、「文部省の忠臣義士達」に追い立てられ、不敬事件を起こす。次に「余は或る思想を有つて居つた」ので、著述に従事した。そして「余を始めて広く日本の読書界に紹介した者は徳富蘇峰君である」と彼は書く。蘇峰は当初『国民之友』や『国民新聞』の主筆として平民主義を唱え、ヨーロッパ文明の受容による日本の近代化を考えていた。こうした遊後の蘇峰は、「薩摩蛮勇内閣の官吏」となり、「其時の余の失望」は、「実に譬るに物がなかつた」とまでいう。

以後、朝報社に入ったことが記され、「社会改良の任に当たらんとした」が、ここにも問題多く、「多くの偽改革者」を見る。鑑三

は言う。「今や正義人道の満天下に唱へらるゝに関はず、一つの改革事業の挙らざるを見て、社会改良なるものが今や一つの流行物となつて、多くの懶惰書生を駆つて、其唱道者たるに至らしめしことは争ふべからざる事実である」と。かくて「改革事業の俗化せらるゝを見て早く之に対して嫌気を生じた、余は何か他に俗化されない事業に就かんとした。爾うして余は之を基督教の伝道に於て発見した」と言い、それが「余が主として目下従事しつゝある社会改良事業である」との結論に導く。以下のようなのだ。

平民主義は之を唱ふるに易くして行ふに難い、日本人は生来の貴族であるから、口に平民主義を唱へても一旦得意の地位に達すれば純然たる貴族と化して平民を蔑視する、斯う云ふ国民に向て平民主義をいくら説いても無益である、真個の平民を作らんと欲はゞ人を直に大平民の模範なる耶穌基督に導くに若くはない、余は平民主義を説いて一人の平民を作つたことはないが、基督なる人物を紹介して多くの新面目なる平民を作つたことが幾度もある。

鑑三の月刊誌『聖書之研究』への道行きを語ることはである。これは徳富蘇峰への、さらに言うならば平民主義への訣別の辞であり、以後はキリスト教伝道者として生きるとの宣言ともこれよう。彼は聖書の研究こそ、神から与えられた自身の終生の仕事と自覚し、その死に至るまで雑誌『聖書之研究』と共にあることになる。鑑三の以後の言説の多くは、ここに見ることが出来る。それは彼自身が命名した、(紙上の教会)として結実し、発展することになる。

二 日露戦争反対論

『聖書之研究』の刊行に力を入れる

一九〇二(明治三五)年は、一月三日、日本基督教会千葉教会で開かれた『聖書之研究』の読書会に出席(小山内薫が同行)したのはじまり、同月十二日には、前述の浦和玉蔵院での理想団浦和支部発会式に、また、二十七日は『萬朝報』三千号記念祝会に出席するなど、鑑三の年明けは、相変わらざるの忙しさであった。そうした中で彼は、三年目を迎えた『聖書之研究』の刊行に力を入れる。発行所は、この雑誌のために作つた聖書研究社である。

三月二十三日、鑑三は四十一歳の誕生日を迎えた。「不惑」の歳を過ぎても、彼には惑いが尽きなかった。家庭人としての彼は、二児の親であった。ここでこの時期の鑑三一家に光を当てておこう。

妻しづは一八七四(明治七)年五月二十日生まれなので、当時二十八歳、美しく賢明な女性である。二人の間には二児がいた。すでにふれているが、ルツ(一八九四・三・一九生、当時八歳)と祐之(一八九七・一・一二生、当時四歳)である。ルツは顔立ちも鑑三に似た賢い娘、祐之は活発な、やんちゃ坊主である。後章でふれるが、ルツは早世し、祐之はたくましく成長し、一高野球部の投手として大活躍する。その豪腕ぶりは、今以て語り継がれているところだ。祐之は後年、北海道帝国大学教授を経て、東京帝国大学医学部教授となり、精神医学を専門とした。

ところで、鑑三にはもう一人の子(娘)がいた。最初に結婚した浅田タケとの間にできた子、ノブ(一八八五・四・一五生)である。当時ノブは十七歳になっていた。ノブは群馬県立高等女学校(現

群馬県立高崎女子高等学校)の一期生として、この年に卒業している。彼女は浅田家の養女となっており、卒業後はじめて上京し、内村家に一週間滞在、次第に鑑三の精神的感化を受けるようになる。そして内村家への復縁の問題も生じたが、それは実現しなかった。

ノブはその後、津田梅子の創立したばかりの女子英学塾(現、津田塾大学)に学ぶが、中退し、養父母の住む群馬県神川村の万場に帰り、地元の神川高等小学校の代用教員となっている。そして休暇の度に上京しては鑑三の教えを受け、雑誌『聖書之研究』によって信仰を養われたという。こうしたことも、日永康(ノブの子)の「浅田ノブの復籍問題」に詳しい。なお、鑑三の息子祐之と結婚した内村美代子の「内村鑑三の日常生活」というインタビュー記事(聞き手鈴木範久、『晩年の父内村鑑三』収録)にも、ノブに関する貴重な証言があつて参考になる。

さて、時代は内村鑑三を巻き込みながら進む。この年(一九〇二)は第三回夏期講演会(七月二十五日～八月三日)が行われ、鑑三の他に大島正健・黒岩涙香・津田仙・田村直臣らが講師を務め、若き大賀一郎・小山内薫・倉橋惣三・斎藤宗次郎・志賀直哉らが参加した。入隊中の有島武郎も途中出席している。

四十代に入った鑑三の講演は、円熟味を増していた。それが優秀な青年たちを捉えた。鑑三はよく準備をして講演に臨んだ。内容ばかりか、身振り手振りから滑舌・声量にも配慮した劇的な講演である。それはアメリカ留学中、彼に大きな影響を与えた、アマースト大学のシリー学長ゆずりのものと言つてよいのかも知れない。ちなみに内村美代子は、右のインタビュー記事で、「私は父を、日本で出た最高級の雄弁家の一人ではなかったか」とまで言っている。

角筈バムフレット

『聖書之研究』と共に発行されていた『無教会』は、八月、十八号で終刊となる。すでに述べたところだが、鑑三は早く『基督信徒の慰』で、「余は無教会となりたり」と書いていた。雑誌『無教会』創刊号では、「無教会」は教会の無い者の教会であります」と言い、「無にする」とか「無視する」とかいう意味ではないと言っている。現代のプロテスタント各教派の人々には、この辺りのことが、いまだ十分に理解されていないように思われる。鑑三はこの時期も、招かれれば喜んで旧日本基督教会をはじめとするプロテスタント各派の教会で、説教や講演を行っている。

鉱毒事件への関心も、それなりに持続し、暮れの十二月二十六～二十七の両日には、足尾銅山鉱毒被害地に『聖書之研究』読者へのクリスマス・プレゼントを届けるため、田中正造の案内で現地を巡回するということもあった。相変わらず忙しい鑑三の日々である。

日露戦争開戦前年の一九〇三(明治三六)年は、『角筈バムフレット』第一如何にして基督信者たるを得ん乎』を聖書研究社から刊行。この刊行物シリーズは、以後一九〇七(明治四〇)年二月十六日に『角筈バムフレット』第九 基督教と社会主義』を刊行するまで続いた。間の第二～第八までのタイトルと刊行日を記すならば、

- | | |
|---------------------------|------------------|
| 第二 基督教は何である乎 ^か | 一九〇三(明治三六)年三月二二日 |
| 第三 国家禁酒令 | 一九〇三(明治三六)年一月一七日 |
| 第四 小供の聖書 | 一九〇三(明治三六)年一月八日 |
| 第五 日本国の大困難 | 一九〇四(明治三七)年二月五日 |

第六 聖書は如何なる書である乎

一九〇四（明治三七）年四月一日

第七 家庭の聖書

一九〇六（明治三九）年三月五日

第八 三条の金線

一九〇六（明治三九）年九月一六日

となつてゐる。いずれも講演や説教などで、いったん『聖書之研究』に載せたものを、小冊子としたのである。刊行はすべて聖書研究社で、中には版を重ねたものもある。パムフレット第二の「基督教は何である乎」は、『内村鑑三全集11』に載つてゐる表紙写真を見ると、第十一版が用いられてゐるが、版を重ねるほどよく読まれたらしい。

この巻は「基督教は何である乎」と、付録として「基督教の神髄」から成る。明治三十年代半ばは、キリスト教が未だ西洋伝来の新思想の意味もあつて、こうしたタイトルそのものに魅力を感じさせるものがあつたのかも知れない。それにしてもわずかの期間に十一版とは驚く。

聖書研究社

聖書研究社は、いまや鑑三にとって伝道の発信地、「紙上の教会」運動の役割を担うばかりか、一家を支える収入源としても、なくてはならぬ存在と化してゐた。具体的に言うなら、聖書研究社は雑誌『聖書之研究』の刊行元であるばかりでなく、さまざまな書籍やパムフレットの発行元の役割を果たしてゐたのである。後には「柏木絵はがき」なるものまで、「東京聖書研究社」の名で出している。財政的に苦勞した時代の中で、彼は文筆で生きようと数々の書籍を

警醒社書店その他から出してきた。そうした中で自ら出版のやり方を覚えるに至つたとしてよからうか。鑑三は以後、生涯を通して『聖書之研究』と聖書研究社を大事にした。第三回夏期講談会の募集に際しては、『聖書之研究』誌に「本誌の読者にあらざる者は来る勿れ」との強気の広告を出してゐるほどである。

聖書研究社という出版社を持つた鑑三は、それまでの鑑三とは一味変わった処世術を見せるようになって行く。雇われ身分からの離陸である。かつて北越学館の雇われ教頭を宣教師らとの対立で辞任した時は、這々の体で東京に舞い戻る。その後、当時の日本の最上府であった、第一高等中学校で不敬事件を起こした時は、辞任をしても言論上の迫害はやまず、当初は住まいにまで押し寄せる暴漢まがいの者からの迫害もあつて、途方に暮れるほかなかつたほどである。

その京都時代は、貧窮のどん底であり、定期的な収入などはなく、著述でのかつかつの生活を余儀なくされた。出版社を経由しての収入などは、高が知れてゐるからである。彼はそうした体験の上で立つて、聖書研究社という出版社を自ら立ち上げたのである。追い追いつけるが、その試みは伝道上も経理上でも成功した。

日露戦争は間近に迫つてゐた。彼が大きな収入源であつた『萬朝報』の発行元朝報社を、幸徳秋水・堺利彦と共に退社するのは、一九〇三（明治三六）年十月九日のことであるが、それが出来たのも、聖書研究社という自前の出版社を持つていたからとしたい。当時内村家では、鑑三の母ヤソが精神病、いま言うところの統合失調症を病んでゐた。国民健康保険法などなかつた時代である。母の療養費は、月々かなりの額に達してゐる。それゆえ朝報社を辞めることに

は、家計上覚悟が必要であった。彼は聖書研究社に賭けるほかなかった。彼はあえてそれを断行し、非戦論者として雄飛する。

強硬な反戦論

戦争一年前に、鑑三は「戦争廃止論」という文章を『萬朝報』に書いている。全集でも二ページにも及ばない短い文章であるが、言わんとすることは、はっきりしている。冒頭二行で彼は、「余は日露非開戦論者である許りでない、戦争絶対的廃止論者である、戦争は人を殺すことである、爾うして人を殺すことは大罪悪である、爾うして大罪悪を犯して個人も国家も永久に利益を収め得やう筈はない」と書く。明確な、誰にも理解できる戦争否定論である。そして十年前の日清戦争を例にあげる。以下のようにだ。

近くは其実例を二十七八年の日清戦争に於て見ることが出来る、二億の富と一万の生命を消費して日本国が此戦争より得しものは何である乎、僅少の名譽と伊藤博文伯が侯となりて彼の妻妾の数を増したることの外に日本国は此戦争より何の利益を得たか、其の目的たりし朝鮮の独立は之がために強められずして却て弱められ、支那分割の端緒は開かれ、日本国民の分担保に非常に増加され、其道徳は非常に墮落し、東洋全体を危殆の地位にまで持ち来つたではない乎、此大害毒大損耗を目前に視ながら尚ほも開戦論を主張するが如きは正氣の沙汰とは逆も思はない。

十年前の日清戦争の際、鑑三は当初義戦論を唱えた(本論第七章の

「日清戦争義戦論」参照。が、戦争が進むに従い、彼にはそれが「義戦」どころか、日本と中国(清国)との朝鮮をめぐる争いであることを知る。やがて日本は閔妃暗殺事件を起こす。京都において、この事件を聞いた鑑三は、「時勢の觀察」(『国民之友』一八九六・八・一五)というタイトルの文章を一気に書き、そのやり切れない気持を託したと言ふこともすでに詳説した。

内村鑑三が日清戦争十年後の日露戦争に際して、強硬に反戦論を唱えたのは、この苦い体験もあつてのことなのだ。彼はかつて義戦論を唱えたことを深く反省した。鑑三は戦争に義戦などないことを自覚する。日露開戦はあつてはならないものだった。彼は非戦論を貫くために、日露戦争肯定に傾いた朝報社を退社する。その際鑑三は、「退社に際し涙香兄に贈りし覚書」を書いていく。それを読むと、彼は戦争に同意する朝報社と主催者の黒岩周六(涙香)に腹を立てて辞めたのではなく、「止むを得ず、多くの辛らき情実を忍んでのことだと言っている。朝報社と黒岩涙香には、鑑三はさまざまなこと世話になった。鑑三を引き立て、ジャーナリズムの旗手としたのは、徳富蘇峰であり、また、他ならぬ涙香であつたからだ。それに鑑三と涙香とは、足尾鉍毒反対運動での同士でもあつた。共に現地を視察し、理想団を結成し、鉍毒演説会では講演を共にした。けれども、自身の信念を曲げるわけにはいかなかった。退社することは、ジャーナリズムの旗手としての立場を失うに等しいことでもあつた。ゴシップ報道から出発した『萬朝報』であつたが、この頃には日本を代表する新聞となつていたからである。若者にも人氣があつた。少し後の芥川龍之介や恒藤恭や矢内原忠雄時代の一高自治療では、各寮生の投票で何紙かの新聞を部屋毎に採るケースが普

通となり、『萬朝報』は、その際も採用されることが多かった。鑑三の名は一時『萬朝報』と共にあり、彼はこの新聞を根城にジャーナリストとして雄飛したのである。その読者には、エリートの知的青年も多かった。そうした舞台を放棄するというのは、彼ら読者に自分の考えを知ってもらえなくなるばかりか、金銭的にも辛いことであつた。が、彼はあえてこの拳に出ざるを得なかつたのである。

彼の朝報社退社は、同時期に退社した社会主義者の幸徳秋水と堺利彦の立場とは異なる。日本の近代の思想史は、ままた鑑三の朝報社退社を幸徳らとまったく同じレベルで論じることが多い。が、共通した部分はむしろあるが、鑑三の退社は、自己のキリスト教信仰から来るものであつて、十年前の日清戦争当初の言説への反省もあつて、それはより深刻な行動を伴つていた。

非戦論者となつた理由

鑑三の「退社に際し涙香兄に贈りし覚書」は、冒頭「小生は日露開戦に同意することを以て日本国の滅亡に同意すること、確信致し候」との過激な一文を以てはじまる。それは「非戦論」に至る決意をはつきりと述べたものだ。また、鑑三には自身が非戦論者となつた理由を懇々と語つた談話に、「余が非戦論者となりし由来」がある。ここでは四つの項目を立てて、自身が「非戦論者」となつた理由を述べる。要点を摘記しよう。

その第一は、自分を非戦論者にしたのは、『聖書』殊に『新約聖書』であつたと言う。『聖書』の研究から非戦の正しさを学んだとするのである。第二は、自分の「生涯の実験」にあつたと言う。それは北越学館事件この方、鑑三に絶えずつきままとつた紛争、―近くは『東

京独立雑誌』廃刊時のトラブルを乗り越えた体験を指すのであろう。当時さまざまな中傷・批判の中にあつて、鑑三は反論を控え、「無抵抗主義」をとつた。「結果、私は大に心に平和を得、私の事業は其人達の攻撃に由り、差したる損害を被ることなく、夫れと同時に多くの新らしい友人の起り来りて私を助けて呉れるのを実験しました、私は其時に闘争の如何に愚に思はして如何に醜いものであるかを浸浸と実験しました」と言い、「無抵抗主義の利益」を説く。

第三は、過去十年間の世界の歴史のもたらした弊害を挙げる。鑑三は、日清戦争が「戦争の害あつて利のないことを教へ」たように、一八九八(明治三二)年にアメリカ合衆国とスペインの間で起きた戦争(米西戦争)の結果を見よと言う。戦争はアメリカを勝利に導いたものの、自由国アメリカは今や「明白なる圧制国」「世界第一の武装国」となろうとしている、その結果もたらした「彼等の社会の腐敗墮落と云ふものは実に言語に絶えない程」だとする。鑑三は、イギリスのアフリカでの戦争―英杜戦争にしても然りだとする。

鑑三を非戦論者にした第四は、アメリカのマサチューセッツ州スプリングフィールドで発行されている平和主義の新聞The Springfield Republicanという新聞の影響であつたという。「私は過去二十年間の此新聞の愛読者であります」と鑑三は言うが、それはアメリカ在住のD・C・ベルから送つて貰つていたものなのだろう。鑑三によれば、この新聞は「私の見た最も清い最も公平なる新聞」であり、「平和主義者」であり、「絶対的非戦論者といふではありませんが、併し常に疑ひの眼を以て総ての戦争を見る」ところがあり、この新聞を二十年間読み続けることで、その「平和主義に化せられ」と言い、以上の四つが自分を非戦論者にし、平和を求める者にしたとま

とめる。

日露戦争は、満洲（中国東北部）をめぐる列強国の対立の一つであった。日本は一九〇二（明治三五）年一月、日英同盟協約をロンドンで調印し、朝鮮・満洲での利権強化に努めていた。ロシアとの関係は、満洲の利権を巡って紛糾する。ここに至って一部民間の反政府派は、日露両国の交渉を軟弱だとして攻撃し、ロシアとの開戦を促すようになる。戦争前年の六月には、東京帝国大学の七名の博士が連名で、対露強行案を建議する。また博士号が希少価値を持つて受け入れられていた時代で、彼らの提言は一定の支持を集めることになる。戸水寛人（とみずひろと）以下七人の博士たちは、六月十日付で書かれた意見書の中で、開戦論を提言した。六月二十四日にそれは公表され、戦争やむなしの世論の形成に一役買うようになる。

鑑三はこうした中で、「戦争廃止論」を書き、戦争絶対反対論を強く押し出すことになる。「七博士」の愚論に、彼は我慢がならなかったのである。いま、鈴木範久編『内村鑑三選集2 非戦論』^{〔14〕}を繙くと、右の「余が非戦論者となりし由来」（『聖書之研究』56号、一九〇四・九）をはじめとして、鑑三の非戦に関する論は数多く、枚挙に暇ないほどであるのを確認させられる。

絶対的非戦主義

日露戦争を前にして、鑑三は『萬朝報』の刊行元の朝報社を去った。彼の非戦論の多くは、以後、雑誌『聖書之研究』誌に載る。『萬朝報』という大きな報道機関には書けなくとも、彼には個人誌『聖書之研究』があった。それは彼の言論の砦となっていた。その言論の新たなターゲットは、日露戦争にあった。彼の説く非戦論は、〈絶

対的非戦主義〉のサブタイトルを付した「平和の福音」^{〔15〕}によく示されている。

ついでに記すなら、鑑三は「平和」ということが好きだった。「平和の宗教」をはじめ、「平和の福音」「平和の希望」「平和の基」「平和の勝利」「平和の歓迎」「平和の告知」「平和の到来」「平和の実現」と例をあげればきりがないほどである。「平和」ということを頭において、「の」という格助詞を用いての使用で、どれもが明解な平和論である。彼は「平和」がいかに大切かを『聖書』、特に新約聖書の例をもつて示す。ここに取り上げる「平和の福音」では、冒頭新約聖書の「マタイによる福音書」から二つの箇所を引用する。以下のような。

平和を求むる者は福なり、其の人は神の子と称へらるべければなり（馬太伝五章九節）。
イエス彼に曰ひけるは爾の剣を故処に収めよ、凡て剣を取る者は剣にて亡ぶべし（全廿六章五十二節）。

二箇所とも、新約聖書のよく知られた箇所である。これらの文章は、日露戦争開始およそ五ヶ月ほど前に執筆されたものだ。聖書引用に続いて鑑三は、「今や戦雲、東亜の空を蔽ふに方りまして、^{〔16〕}に刻下の最大問題に對して私共キリストを信ずる者の態度を明かにして置くの必要があると思ひます」と言い、キリスト者は「聖書の確言」^{〔17〕}に頼って「進退を定む」ことの必要を言う。そして「聖書の、殊に新約聖書」の命じる所は、「絶対的の平和」にあるとする。その上で新約聖書のロマ書十二章十八〜二十一の箇所を引く。今その

箇所を『新共同訳聖書』によって引用するなら、次のように翻訳されている。

すべての人と平和に暮らしなさい。愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「復讐はわたしのすること、わたしが報復する」と主は言われる」と書いてあります。「あなたがたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」悪に負けることなく、善をもつて悪に勝ちなさい。

鑑三は、「是は何にも個人と個人との間に関してばかりの教訓ではありません、人と人との間の関係は凡て斯くあるべき筈のものでありまして、人の集合体なる国民と国民との間に関しても適用すべき神の教訓であります」と言い、「戦争は人を殺すことでありまして、「人を殺す者は窮なき生命その衷に在ることなし」との使徒ヨハネの言は火を賭るよりも明かなる真理であります」とし、「私自身は今絶対的非戦論者であります」と高らかに宣言する。

この非戦論の最後で鑑三は、「私共平和の主イエスキリストを主として戴く者は絶対的に戦争に反対しなければなりません」と呼びかけ、「神に頼り其能力を仰いで茲に是非共開戦を喰ひとめなければなりません」と読者に強く訴えるのであった。彼の非戦論は、かつて日清戦争で義戦論を称えた反省に立つ。先に紹介した「戦争廃止論」など、その最たるものだ。当時の日本のキリスト教界で戦争反対を称える者は、鑑三の他、群馬県の安中教会の柏木義円など少数派であり、植村正久や海老名弾正などプロテスタントの主流派

の人々の多くは、皆、戦争に賛成であった。鑑三はそうした中であつて戦争反対を叫び続けたのである。闘う内村鑑三の面目躍如である。

現実との対応に腐心する

しかし、いったん開戦となると、現実との対応に彼は腐心する。「戦時に於ける非戦主義者の態度」(『聖書之研究』51号、一九〇四・四)に、それを見ることが出来る。鑑三は「私共は戦争が始まりたればとて私共の非戦主義を廃めません」としながら、では、どのようなことが非戦主義者に出来るのかと問い、「平和の恢復の期を早め、且つ其の機会を作る」ことや「出征兵士の遺族の慰問」や「総ての手段を尽して彼我の間に存する総ての敵意を排除し、彼をして我を信ぜしめ、我をして彼を敬せしむるの道を講ずる」ことなどをあげた。そして、してはならぬことは、「基督教の教師にして聖書の言を引いて戦争を奨励する」ことだとする。これは日露戦争に限らず、鑑三没後の満洲事変にはじまり、日中戦争、そしてアジア・太平洋戦争に至る、いわゆる十五年戦争時代のキリスト者に投げかけられたことばとしても機能するものとなる。

先に紹介した若手県花巻在住の斎藤宗次郎は、日露開戦を前にして兵役や納税問題に悩んでいた。彼はそれを鑑三に手紙で訴えた。斎藤の『恩師言内村鑑三言行録』の弟子による『を見る』と、開戦二ヶ月前の一九〇三(明治二六)十二月六日に、「兵役の事」と「納税の事」に関して、「真面目に基督に服従して小生は全然兵役なるものを拒絶せざるを得ない」、また「納税は其大部分は陸海軍費となるから」これまた否定しなければ、「二人の主」に仕えることになる

ので、否定するという便りを「愛慕する」鑑三に出し、如何すべきかを問うた。兵役忌避も納税拒否も、当時にあつては犯罪である。齋藤は岩手師範学校を卒業後、小学校の教師をしていたが、当時はその過激思想のため当局から休職を命じられていた。

未だ二十七歳の齋藤宗次郎は、思い詰めていたのである。この便りを受け取った鑑三は、同年十二月八日付で、「今日書面を以て御問合せの件は頗る重大なる事件に御座候間御面会の上篤と小生意見申し上ぐるまでは確定御控へ願候」との返事を出している。その上で同年十二月十三日、及び十五日付書簡で、十八日午前十一時、赤羽発汽車で花巻に行く旨を伝えている。十三日付書簡には、花巻到着「其夜十二時半」とあるから、十三時間半もかかることになる。実際には汽車の遅延で、到着は十九日の午前二時になった。新幹線などなかった時代ゆえ、東京から花巻に行くのは容易ではなかったのである。

『恩師言内村鑑三言行録 ひとりの弟子による』には、その日の早朝、鑑三から「兵役納税の問題に就て真理と真理の応用を混同すべからず、応用は自己一人の事なれば決して他人に諮るべからず強いべからず」との忠告を受けたとある。鑑三は齋藤宗次郎の過激な思想ともいえる兵役・納税拒否思想を花巻まで行き、断固思い止まらせたのであった。

三 角筈での聖書講義

「無教会」ということば

内村鑑三は第一回夏期講談会後の一九〇〇(明治三三)年秋から

聖書講義の会を自宅の角筈(現、新宿区西新宿、校長を勤めていた女子独立学校の一角)で開いていた。これを角筈聖書研究会という。この聖書研究会は、毎日曜日の午前、会場の都合もあつて当初二十人、のち二十五人に決め、定員を若干オーバーしても出席を認めたという。この頃から鑑三は「無教会」ということばを意識的に用いることとなる。雑誌「無教会」創刊号に載つた「無教会論」に、それを見てみよう。重要と思われる三箇所を引用する。

「無教会」と云へば無政府とか虚無党とか云ふやうで何やら破壊主義の冊子のやうに思はれますが、然し決して爾んなものではありません。「無教会」は教会の無い者の教会であります、即ち家の無い者の合宿所とも云ふべきものであります、「無教会」の靈上の養育院か孤児院のやうなものであります、「無教会」の無の字は「ナイ」と訓むべきものでありまして、「無にする」とか「無視する」とか云ふ意味ではありません、金の無い者、親の無い者、家の無い者は皆な可憐な者ではありませんか乎、さうして世には教会の無い、無牧の羊が多いと思ひますから茲に此小冊子を発刊するに至つたのであります。

真性の教会は実は無教会であります、天国には実は教会なるものはないのであります、「われ城(天国)の中に殿(教会)あるを見ず」と約翰の黙示録に書いてあります、監督とか、執事とか、牧師とか教師とか云ふ者のあるは此世限りの事でありませぬ、彼所には洗礼もなければ晚餐式もありません、彼所には教師もなく、弟子もありません。

然し此世に居る間は矢張り此世の教会が必要であります、爾うして或人は人の手を以て作つた教会に参し、其処に神を讚美し、其処に神の教を受けます、或教会は石を以て作られ、或教会は煉瓦を以て作られ、又或教会は木を以て作られます、然し私共何人も出席する教会を有つといふわけではありません、世に無教会信者の多いのは無宿童子の多いのと同じであります、茲に於てか私共無教会信者にも教会の必要が出て来るのであります、

「無教会」といふことばそのものは、『基督信徒の慰』で、すでに用いられていたとは、本論の第六章の三「無教会主義の源流」で触れたところだが、ここに至つて鑑三はそれをきちんと理論化しようとしているのである。確かに「無教会」とは、誤解を生むことばでもある。小原信は「鑑三のいう無教会は、決してアナーキーに走るものではない」と言い、「結果として、一人の師、鑑三を中心にかたい絆で結ばれた同一の信仰をもつ者の共同体となつた。そこでは、一定の儀式をもたず、教義にこだわらず、職業的な教役者をおかず、特別な礼拝堂をもたないで、ただ聖書を読みつづける方法をとつたのである」とまとめる。

また、近年『紙上の教会』と日本近代無教会キリスト教の歴史社会学(岩波書店、二〇一三・六)という一書を著し、内村鑑三の無教会主義に言及した赤江達也は、無教会主義、無教会とは何かという問いに対し、「一方で教会を拒絶しながら、他方でより純粋な教会を追求しようとする、という二つのベクトルの緊張と葛藤が近代宗教としての無教会を特徴づけている」との巧みな捉え方を示す。

礼拝形式は、多分に既成プロテスタント教会と一致する部分が多い。讚美歌と祈りのあり方は、類似する。特に祈りは、内容の濃さが求められた。鑑三はこのような信徒の集まりの場を、前述のように新宿角筈の自宅ではじめていた。この世の教会は、カトリック、プロテスタントとも、一般に来会者を身分や年齢などを問わず、分け隔て無く歓迎するのが建前である。が、鑑三の始めた無教会主義の集会では、来会者は鑑三によつて厳選された。

また、聴講を許されても、無断欠席は厳禁であつた。この方法は、以後鑑三の集会から育つた伝道者たちにも受け継がれていく。また、鑑三は「豚に真珠」の伝道方法を決して採らない。緊張感に溢れた集会がそこに成立する。当初の出席者は鑑三の家族のほか、夏期講談会(第一回は、一九〇〇・七・二五、八・三)に出席した青年たちが主であつた。会場には三畳ほどの玄関と四畳半の事務所、それに鑑三の六畳の書斎を開放して用いた。それゆえ鑑三は、先にも記したように出席する会員を、一応二十五人に絞らざるを得なかつたのである。

母ヤソの擁護施設入り

日露戦争がはじまり、その酣(たけなわ)の一九〇四(明治三七)年の秋は、鑑三にとつて特別に忙しく、しかも、多難な日々であつた。言い方を変えるなら生涯重荷を負つて歩んだ彼の、特記してよい時期であつたと言ふべきか。

重荷の第一は、母ヤソの介護施設入り、さらに、その死をめぐつての兄弟間の争いである。その二は、日露戦争による戦死者が『聖書之研究』の愛読者にも及んだことだ。一方、この時期、後年の鑑

三の手足となつて働く、先に少しばかり紹介しておいた斎藤宗次郎との交わりの深まり、それに『聖書之研究』の編集や、後年『羅馬書の研究』(向山堂書房・聖書研究社、一九二四・九)の成立に貢献した畔上賢造あぜがみけんぞうという誠実な人物との邂逅があつた。それぞれの事例の内実を以下に記しておこう。

最初に、鑑三の母ヤソの病氣と死をめぐる兄弟間の争いに触れる。ヤソは老齡期を迎え、その病状は深刻さを増していた。母の病氣とは、被害妄想や独言をはじめ、奇妙な行動に走つたりする精神の病、今日言うところの統合失調症、それに認知症をも伴つた病氣であつた。しかもヤソは眼を患い、失明寸前であつたらしい。政池仁の『内村鑑三伝再増補改訂新版』が、その第八章に「母の死と兄弟の不和」の項目を立て、詳しくその辺の事情を語る。

鑑三は母の病が進行し、自宅での介護が限界に達していることを悟ると、一般には巢鴨の癲狂院てんきやういんと呼ばれていた東京府巢鴨病院(現、東京都立松沢病院の前身の一つ)に入れることになる。アメリカ留学時代、生活のため養護施設の介護人をしたこともあつただけに、鑑三にはこうした場合、家での介護には限界があり、危険であることを十分知っていたからである。けれども、当時の日本には、介護を必要とする老人のための福祉施設は稀であつた。鑑三は、養父母を、角筈の自宅の一角に増築した部屋に引き取つていた。そして夜は、父宜之と交互にヤソの脇に寝て、看病をする。が、母ヤソには幻覚なども生じ、手に負えなくなつたので、精神科病院の巢鴨病院に入れたのである。

それが達三郎をはじめとする弟たちの猛反発を買うことになる。介護は最後まで戸主である長男が、自宅で行うのが美徳とされた時

代である。介護施設でもあつた精神病院に入れるなどけしからんというわけで、非難は鑑三夫婦に殺到した。ヤソはかつて鑑三の勧めによつて、一度はキリストの教えに従つたのだが、その晩年は、キリスト教を離れていた。それだけに彼女の扱いは、難しくなつていたのである。

政池仁も右の本に書いているが、「母の看病は長男夫婦がする義務があるという昔風の考え」もあつて、以後、鑑三は弟三人(達三郎・道治・順也)から疎まれることになる。鑑三が母ヤソを巢鴨の病院(現、東京都立松沢病院)に入院させたのは、被害妄想に陥つたヤソに手を焼いてのことであつた。ヤソ入院の当日のことを子息内村祐之は、「明治三十七年の秋であるから、私が七歳になるうとしたころのある日、この祖母が、家の縁先で、ひどくおびえ叫んで抵抗するのを、数人の者が、無理に抱きかかえるようにして連れ去つたのを覚えてい」¹⁸⁾と回想する。

弟妹との不和

現在でも統合失調症や認知症の患者を施設に入れるには、回りの親族の理解が必要である。患者の面倒を日々直接看る者と、月に一、二度来て、様子を見る者との差は大きい。日々面倒を看る者が悲鳴を上げて、たまにきり来ない回りの親族には、それは分からない。まだ大丈夫とか、一言二言話を交わしては、けっこう元気にやつているじゃない、との感想しか持たないのである。日々患者と接している鑑三夫婦には、「もう限界」と感じられることでも、偶たまにきり見舞いに来ない達三郎をはじめとする弟たちには、「まだ入院など必要ない」と映るのであつた。当時、癲狂院てんきやういんと呼ばれた精神病院の

介護施設に入れるのは、親不孝以外の何物でもないと達三郎らは考
え、鑑三夫婦の処置に不満を持ったのである。

これまた政池仁が指摘していることであるが、「この種の病人は、
近親や一ばん親切にしてくれる人を恐れたり、憎んだりするのが常
である」ので、鑑三は母ヤソの扱いで、ほとほと手を焼くことにな
る。その上での強制入院の処置に踏み切ったのであった。鑑三には
仕事がある。『聖書之研究』は月刊誌である。その刊行を維持する
だけでも大変なのに、加えるに日曜日の講演(説教)の準備、各地
への伝道旅行と息つく暇もない忙しい日常である。とは言っても、
老いた父宜之と妻しずくに母の介護を全面的に任せられるわけにもいかな
い。鑑三は老老介護の悲劇を知っていた。それ故の母の入院であつ
た。母ヤソの入院は、日露戦争中の一九〇四(明治三七)年十月三
十一日のことで、翌月十一月十一日には六十五歳で死去している。
以後、達三郎をはじめとする弟妹たちとの確執は、際限のないも
のとなる。が、鑑三はじつと耐える。その頃の鑑三の姿と状況を、
小原信は次のように捉える。鑑三の肉親の兄弟たちとのやりきれな
い関係をよく見抜いた文章だ。

このころの鑑三の生活ぶりを、まとめて冷静に書くというこ
とは、気が重いしんどい仕事である。いまになってみると、鑑
三がそのころ、いかに黙って多くのことに耐えていたか、など
さまざまな重荷がいろいろ見えてくる。母ヤソのことにして
も、施設で生活したことのない弟妹してみると、マイナスの
イメージばかりが先行したようである。

だから、兄の母に対する処置は、非人間的でひどい仕打ちと

思われ、そのまま母が死んだことは、兄が母を殺したも同然だ
と思えて、兄は許すことのできない親不孝者だということにな
り、弟妹とのあいだには修復できないひびが入ってしまった。

鑑三が「霊」の兄弟のことをほめてかいているとき、鑑三は
彼なりに、現実の骨肉の兄弟に対する、ひそかな失望を実感と
して抱いていたという事実が背後にあることを忘れてはならな
い。それほど、現実のきょうだい(弟妹)とは、うまくいつて
いなかった。

鑑三きょうだいはいはずれも、負けず劣らず気性のはげしい個
性的な人たちばかりであったため、何かちよつとしたことでう
まくいかなくなると、そのぎくしゃくした関係がづづき、おい
それとはまた、うまくとりなすことなど、とても考えられない
はげしい人たちだった。(原文のまま)

各地への伝道に励む

こうした中でも、鑑三は伝道に励む。彼は東武線の北千住く久喜
間の開業で、東京から簡単に行けるようになった埼玉県東部の和戸
(現、宮代町)・杉戸など、無牧の教会における応援伝道にも従う。

角筈聖書研究会の方は、応援伝道の依頼がない限り、日曜日の午前
中に開き、聖書研究を続けていた。先に取り上げた鑑三終生の弟子
となる斎藤宗次郎との仲は、この頃、より深まっていた。特に日露
戦争前年十二月の花巻行きを経て、その絆はいっそう強いものとな
る。鑑三は花巻行きで斎藤宗次郎の兵役・納税忌避を諫めるととも
に、二日間に亘つての伝道集会をもっている。先にも挙げた斎藤の
『恩師言 内村鑑三言行録・ひとりの弟子による』によれば、鑑三は花巻

に来て、「最も愉快なる会合を見るを得たり。花巻には慥かに特別の形に於てキリスト教は植え付けられしを見たり」とまで発言したと言う。斎藤のこの証言の意味は重く、今日花巻出身の宮沢賢治と内村鑑三とのかわりでも再検討が進む。

わたしは宮沢賢治の研究を『賢治童話を読む』として、上下二冊に纏めている²⁰。そこでは「よだかの星」や「銀河鉄道の夜」をはじめとする賢治童話の名作が、キリスト教の影響下になったものであることを論じた。斎藤宗次郎や照井真臣^{まみ}乳をはじめとする岩手の鑑三門下の人々の賢治への影響は無視できない。以後斎藤宗次郎は角笥の鑑三宅をしばしば訪問し、鑑三終生の弟子となる。

一方、鑑三の忠実な弟子として、後年『羅馬書の研究』（向山堂書房・聖書研究社、一九二四・九）の成立に大きく係わる畔上賢造が、はじめて角笥の内村邸を訪れるのも、この頃のことである。畔上は信州上田の出身。一八八四（明治一七）年十月二十八日の生まれである。上田は少し前から鑑三の地方伝道の拠点地の一つとなっていた。この頃までに鑑三は、房総・花巻・信州上田などを地方伝道の拠点として大切に育ててきたのであった。

畔上は上田中学校（現、長野県立上田高等学校）時代に鑑三の講演を、多くの聴衆に混じって聴いていた。早稲田の文科予科に進学した彼には、かつて故郷で聴いた鑑三の力強いメッセージが忘れられなかったのである。それ故、東京に出てきた畔上賢造が、角笥の内村鑑三の家を訪れるのも、自然な成り行き、否、神の摂理とも言えるのである。畔上の回想「内村先生と私²¹」には、その日は「忘れもせぬ明治三十七年の仲秋」とあり、その対面の印象を、以下のように記している。

とゞろく胸をおさへて、私は先生の玄関に立つた。そして紹介状を差し出した。直ぐに元氣よく現はれてきた眼光炯々たる偉丈夫は、云ふまでもなく先生であつたが、その私に対する態度は思つたより穏やかであつた。先生の左手には頼信紙があり、右手には筆があつた。先生は忙しうに云うた、今日は病人でとりこんであるから此次にしてくれ給へ。私はたゞ日曜集會に参加の許可さへ得ればよいのですと云うた。先生は「それでは、よいから、此次から来たまへ」と応じた。あとで考へれば、その時は先生の母上が重体であつたのである。私は故郷において度々檀上における先生の風貌に接した。その頃は肉瘦せて、頬骨とがり、目ふかく凹みかゝやきて、黎黒の顔面より凄氣のほとばしるものがあつた。後年における如き、大家らしい余裕のある様子は全くなかつた。けだし先生の苦闘時代であつたのである。恐い人とは、誰にもすぐ感ぜられた。しかし今日親しく会つてみたら、思つたほど恐くはないので私は大に安心した。そして真直な、正しい人であるとの印象を受けて、私は喜んで家に帰つた。

母の介護をめぐつての兄弟間の争いがあり、心の安らぎをとかく失いがちの中にあつても、鑑三には神の恵みが宿っていた。この時期内村門下となつた斎藤宗次郎と畔上賢三は、以後、鑑三のよき助け人、証人^{あかしびと}として働くこととなる。兄弟間の争いというきびしい現実の中にあつても、彼は恩寵の中にこの世の生を送っていたのである。

『新希望』の時代

鑑三は烈しい性格であった。それゆえ妥協を許さない。多くの有為な青年が彼の許に集ったものの、数年を経ずして、あるいは、かなりたった後にも去って行ったのも、そのこととかわる。しかし、この二人、斎藤宗次郎と畔上賢造は、時に鑑三からひどい仕打ちを受けても、生涯を通してのよき弟子として、鑑三に従い、彼の死に至るまで、否、その死後も、まさに弟子という古きことばがびつたり合うような形で鑑三に尽くした。

鑑三は多くの弟子を持った。その中には近代日本を背負った政治家や実業家や学者や文学者や伝道者がいた。彼らは鑑三の聖書研究に裏付けられた理論に聞き入り、己を高め、それぞれの道を切り拓いていった。が、斎藤宗次郎と畔上賢造の二人は、どちらかというところ、自己の仕事より鑑三の仕事を尊び、その伝道に協力することに全力を費やした。むろん斎藤には当初は小学校の教師や新聞配達、内村門に出入りするようになってからも、この世に於ける相應の事業があったし、畔上にはミルトンやカーライルなどの英文学の翻訳や研究もあり、それだけでも十分意味のある仕事をしていった。

とは言うものの彼らの生涯を通して見えてくるのは、鑑三の影響を受けた無教会主義の立場に立つキリスト教伝道の仕事である。なお、後章(第十一章の二)で述べるが、鑑三畢生の大作で、代表作とされる『羅馬書の研究』は、畔上賢造の存在があつて初めて世に現れたものなのである。

鑑三の角筈時代に、雑誌『聖書之研究』は順調に読者を増やし、母ヤソの死の翌年には、その読者組織である教友会が各地に結成されるようになる。鑑三の言う、いわゆる〈紙上の教会〉は、教友会

組織が生まれることによつて、世にその存在を強く主張することになる。母の死の約半年後の一九〇五(明治三八)年六月から翌年四月までの間、鑑三は『聖書之研究』という雑誌名を一時『新希望』に改めて、心機一転を図る。名称が『聖書之研究』に戻るの、一九〇六(明治三九)年五月号からなので、その間十一月『新希望』の誌名での刊行が続いたことになる。

この時期を多くの識者は、鑑三の『新希望』の時代と呼ぶ。母の施設入りとその死をめぐつて、兄弟間の不和が高じ、希望の見出せない、どうにもならない状況の中で、鑑三はあえて〈新希望〉なることばを選んで、その拠り所とする雑誌の誌名に採用したのである。

この時期の編集を手伝ったのは、後年の劇作家・演出家の若き小山内薫である。小山内は鑑三の指導を受け、編集の面でもすぐれた才を発揮した。そのためか改題による購読者の減少などはなく、逆に増えるという効果を生んだ。今日でも月刊雑誌は、特別な総合雑誌でもない限り、二千冊以上の読者を得るのは容易ではない。それが三千冊を優に超える部数に達したというのだから凄いものである。当時、「紙上の教会」を標榜し、教派に属さない無教会主義に立つ団体で、これだけの発行部数を誇った雑誌はない。

小山内薫・倉橋惣三ほか

すでに前章で述べたように、小山内薫は、第一、二回の夏期講演会の出席者であつた。当時は一高の学生であり、鑑三の強い影響を受けることとなる。小山内は一八八一(明治一四)年七月二十六日、広島市細工町に生まれ、東京で育つた。府立二中を経、一高、東大

英文科とエリートコースを歩むこととなるが、若き小山内には、内村鑑三という対象は、心底から仰ぐべき師表であった。当時の鑑三は足尾鉍毒事件の救済に走り、日露戦争反対論を叫び、毎日曜日には角筈の自宅で、聖書研究会（角筈聖書研究会）を開いて、既成プロテスタント教会をきびしく批判していた。そこに飛び込んだのが、小山内薫と倉橋惣三であった。たまたま体調を悪くして、苦悶していた鑑三は、『新希望』の編集業務をこの大学生らに委ねることとなる。

もともと雑誌の編集などが好きだった小山内薫には恩師の主宰する『新希望』の編集は、まさにふさわしい仕事であったのだ。彼は誠実に仕事に携わり、師の恩顧に酬いようとした。『新希望』72号（一九〇六・二）に鑑三は、「自分の事に就て申上候」という一文を寄せ、原因不明の病に犯され、『新希望』の編集は、小山内薫と倉橋惣三に任せたと記している。

倉橋惣三は、一八八二（明治一五年）十二月二十八日、静岡県鷹匠町の生まれ。一高を経、東京帝国大学文科大学を卒業する。後年の教育学者である。彼は第一回からの夏期講談会の出席者であり、角筈の聖書研究会の会員でもあった。当時鑑三は母を亡くし、弟妹との対立の中で、精神的に参っていた。『聖書之研究』を『新希望』と変え、心機一転を期したのも、きびしい現実からの飛翔を願ったことであつた。そうした折の鑑三を支え、誌名を変えた雑誌の売れ行きを減らすどころか、逆に部数増の結果をもたらしたのは、若き小山内薫と倉橋惣三の尽力によるのであつた。

この角筈時代、彼の許を訪れた一人の青年実業家に、岡山県津山在任の森本慶三がいた。彼は一八七五（明治八）年三月十日の生ま

れで、鑑三とは十四歳ほど年下の呉服商であつた。森本は『東京独立雑誌』の広告で『求安録』を知り、早速取り寄せて読み、鑑三の偉大さを知り、会いたいと思うようになる。そこで津山の家を家族に無断で飛び出し、角筈の東京独立女学校の応接間で鑑三と会う。そして鑑三から「両親の許可」を得るよう説得され、いったん帰郷し、許可を得るや再び上京し、一九〇〇（明治三三）年春から鑑三の集会に出るようになる。以後、彼は鑑三の忠実な弟子として生涯を送った。彼は鑑三を津山に招き、キリスト教講演会を開くなど、この地方のキリスト教伝道に功績がある。また、森本は私財を投げ打ち、津山の地に「津山基督教図書館」（現、森本慶三記念館）を建てたことでも知られる。この図書館開館式と鑑三のことは、第十二章で詳説する。

四 絶対的非戦論と聖書研究

父、宜之の死

一九〇七（明治四〇）年四月十三日、鑑三の父宜之よしゆきが死去した。行年七十五歳であつた。十五日に行われた葬儀の司式は、大島正健が受け持った。式後新宿角筈の自宅から雑司ヶ谷の墓地までは、鑑三を先頭に海老名弾正・松村介石らのほか、親戚一同、それに角筈聖書研究会のメンバーが参列し、そこには志賀直哉も加わっていた。この頃志賀は角筈聖書研究会に熱心に通っていた。彼は鑑三の父宜之の病氣も知っており、その死の前日には見舞いに行つたことが、「志賀日記」²⁸に記されている。

父宜之は、息子鑑三の導きで、キリスト教を信じるようになった。

鑑三に「余の父の信仰⁽²⁾」と題する小文がある。晩年の父を語ったもので、息子から見た宜之評で貴重である。その前半を引用する。

○武士道を以て己を鍛^{きた}上げた彼は晩年に至りては熱心なる非戦論者であつた、日露戦争中と雖も、彼は余と共に非戦論を唱へた、爾^まうして人ありて彼に「貴老の非戦論は御子息に倣^{なら}はれしものならん」と云ふ者があれば、彼は憤然として答へた「倅^{せがれ}は倅^{せがれ}でゐる、私は倅^{せがれ}に信仰を左右せらるゝ者ではゐらぬ」と、ポーツマス平和条約成りしと聞て、彼は「マー善かつた」と幾回となく繰返して曰ふた。

○彼は所謂宗教の熱心家ではなかつたが、然し堅く基督教の根本的教義を信じた、殊に復活の教義は彼が非常に重きを置いた所の者である、彼は海老名弾正君を尊敬し、君の主筆になる雑誌「新人」を毎月欠かさず愛読した、然し海老名君の復活論(寧ろ復活否定論)には全然反対を表した、彼の武士気質はすべての廻り遠い説を斥けた、彼はハーナツク流の研究法を以てしては基督教は到底解らない者であると信じた、彼は又綱島梁川君の『病問録』を読んで曰つた「是れは宗教ではない」と。

父の葬儀、それに伴うこの世的雑事をこなす中でも、鑑三は感謝の祈りを怠らず、角筈聖書研究会での講義も休むことなく続けている。ルカ伝やマルコ伝が、しばしば取り上げられ、この世の例を挙げながら、ずばりと語られる。鑑三独特の聖書研究の開花であつた。

鑑三は肉親の弟妹から邪推され、憎まれ、疎まれながらも、新宿角筈の地で、聖書研究に没頭するのであつた。角筈という地名は、

現在はない。今日の西新宿に相当するところだ。小田急バスの停留所には依然「角筈二丁目」があり、かつての地名を人々に思い起こさせる。もともと角筈は、江戸幕府の直轄領であつた。

鑑三はこの地にあつた自宅(女子独立学校脇にあつた借家)を本拠とした、会員制の角筈聖書研究会を立ち上げたのである。狭い自宅ゆえ、前述のように、鑑三は会員を二十五人に絞ることになる。そして一九〇一(明治三四)年の夏以降、毎日曜日ごとに集会を開いていた。これを角筈聖書研究会と呼ぶ。けれども二年後の一九〇三(明治三六)年の九月以降、この聖書研究会を鑑三はいったん閉じている。その理由を、鑑三は愛弟子となつた斎藤宗次郎宛書簡では、「弟子を作り、教会を作るとの嫌疑を作る」との疑いを受けるのを嫌つたためとする。その再開は、非戦論を展開する直前の翌一九〇四(明治三七)年一月のことであつた。

弟妹から疎んぜられる

鑑三は、この世にあつて実の弟妹から疎んぜられ、孤立していた。が、神との交わりは、より繁くなつて行く。母の死に際して取つた鑑三の態度(自宅介護に限界を感じ、介護施設ともなつていた病院に預けたは、今日では当たり前であつても、明治という時代に、母を施設に入れ、自宅介護を放棄したかに見えた鑑三の行為は、批判的的とならざるを得なかつたのである。鑑三は家族共倒れにならないためにもと、母を病院に入れ、自身は生活を支えるための執筆活動に励んだ。彼は決して楽をしようと思つて母を病院に隔離したのではない。家で仕事(執筆活動)をし、日曜日に集会を開くには、それ以外には方法のないことを、彼はアメリカでの介護人体験を通して

知っていた。

けれども、明治期の日本では老いて病を持った患者を、施設に入れることは、まだ一般化していなかった。しかも弟たちは、別なところ暮らししており、母の病気の実態を捉えていない。たまに見舞いに来るぐらいでは、病人の実状など捉えることなどできない。鑑三は苦渋の決断で、母を病院に入れたのであった。

こうした鑑三のやり方を、達三郎をはじめとする肉親の弟妹は理解できず、反抗を示し、父の死の折りには、その葬儀にも出席していない。「母を葬りて後に誌す」という小文がある。それは「去る十一日私の母は永の苦しき病気の後に終に死にました、其前後には私にも非常の苦みがありました」にはじまるが、筆は極端に押さえられている。そして実の弟妹への不満は、表に出さず、霊の兄弟ともいうべき、『聖書之研究』の読者の同情に謝しているのである。見事な処し方というほかない。

鑑三は自身の背丈を遙かに超える著書を刊行したが（先に紹介した益本重雄・藤沢音吉共著『内村鑑三伝』の巻頭に収められた鑑三アルバムには、著書と背比べをするかのような写真が収められている）、肉親の兄弟たちのことは、ほとんど書かなかった。弟妹への伝道に関しては、若き日はそれなりに努力したものの、成果を挙げることができなかった。それは彼の忠実な弟子といつてよい矢内原忠雄が、父母への伝道こそできなかったものの、兄弟姉妹や子どもたちまでを、よき信仰者に育てたのとは対照的である。鑑三は肉の兄弟に背かれた分、霊の兄弟は厚く遇している。右の「母を葬りて後に誌す」では、自身に寄せられた「深き同情」に感謝し、「キリストを信じる者は単独で私供の艱難を担ふではありません」と言う。その上で「私供は数

百千人と共に之を担ふのであります」ということばが導き出されるのである。

『余はいかにしてキリスト信徒となりしかわが日記より』のドイツ語版鑑三の執筆活動は、母の死、続く父の死の中でも止まらない。書くことよって慰めを得、また、書くことなしには、生活の糧も得られなかったのである。この頃の鑑三を喜ばせたのは、以前英文で書いた『余はいかにしてキリスト信徒となりしかわが日記より』のドイツ語版が版を重ねていたこと、また、スエーデン語やフィンランド語版の訳書も成って、届けられたことである。デンマーク語版の訳書も進行中であった。ドイツ語版は版を重ねたというから多少の印税も入ったに違いない。

しかし、他の言語による訳書は、エージェントなど介在させず、著作権を訳者に譲ることで成立したのではないか。今でもそうだが、エージェントを通すと莫大な料金をとられる。それはわたしの芥川研究書の韓国語訳や中国語訳からして体験したことでもある。それゆえ版權を譲る形にして刊行するのが、学術書などでは普通なのである。この頃より少し後になるが、芥川龍之介らが第四次『新潮』創刊の資金獲得のために、成瀬正一の名で出したロマン・ロランの『トルストイ』なども、著者のロランの好意で版權を譲り受けての刊行であった。鑑三の『余はいかにしてキリスト信徒となりしかわが日記より』の場合も、ドイツ語版は別にして、少数言語の場合の翻訳は、版權譲渡をしたものと思われる。いくら鑑三とはいえ、当時にあつては版權を譲渡しない限り、その著作の翻訳など実現しなかったのではないか。版權譲渡がない場合は、いわゆる海

賊版としての扱ひとなる。

本書のアメリカ版は、鑑三が早くから希望していたにもかかわらず、実現には時間がかかった。日本での英語版は、*How I Became a Christian Out of My Diary* の題名¹⁾、一八九二(明治二八)年五月一日付で、日本の警醒社書店から初版一〇〇〇部で刊行されている。その後アメリカ版は警醒社書店を定本に五〇〇〇部刊行されたという。現行岩波書店版『内村鑑三全集3』には、警醒社版の表紙書影のほか、松沢弘陽による「解題」も付されているので、参考になる。

教友会という組織

鑑三を中心とした教友会という組織は、角筈時代に生まれた。先に述べたように鑑三は雑誌『聖書之研究』を、一時『新希望』と改題した。その一九〇五(明治三八)年十月号に、彼は「教友会の設立」と題した文章を寄せている。

教友会は本誌年来の読者の信仰的並に友誼的団体なり、去る八月中に計画せられ、九月中に少数の教友中に発表せられ、既に数箇所に其設立を見るに至れり、勿論信仰的団体なるが故に是に心靈的以外に何の義務又は責任あることなし。保羅曰く汝等互に愛を負ふのほか、すべての事を人に負ふ勿れ(ロマ書十三章八節)と、若しキリストに在る愛に由て繋がるゝに非ざれば我等を結ぶに何の繩策あるなし、内地又は海外に於ける本誌年来の読者諸君にして、此会合に加はらんと欲する方、又は之を起さんと欲する仁は幸に本社まで御一報あらんことを願ふ。既に設立を見し地は左の如し

越後柏崎 ○同大鹿 ○同三条 ○信濃上田 ○東京角筈
○上総

その他の設立準備中の所数カ所あり、

このような前文に続いて「会則」が掲げられている。最初に「本会は同志二名以上ある所にはこれを組織するを得べし」とあり、中に「強ゆるにはあらざれども禁酒禁煙を努むべし」とか、「出来得る限り日曜日はこれを信仰道徳修養のために持ゆべし」などとある。鑑三には組織者という豊かな能力が備わっていたのである。

教友会時代に鑑三の許に集まった、主立った面々には、浅野猶三郎・青山士・大賀一郎・天野貞祐・田中龍夫・小山内薫・倉橋惣三・鈴木与平らがあり、彼らは「角筈十二人組」と呼ばれた。十二人はキリストの十二使徒に因んだ命名で、他のメンバーに、安藤胖・西澤勇志智・畔上賢造・石橋智信・小野保之・山内権次郎などを挙げる研究者もいる。この時期、鑑三は『無教会』という名の雑誌を刊行していたことは先にふれた。

『聖書之研究』は一時『新希望』と改題されて、一九〇五(明治三八)年六月から翌年四月まで十一ヶ月間続いたが、五月号から元の『聖書之研究』に復した。鑑三は新宿角筈の自宅で、毎日曜日に二十五人に絞った優秀な青年たちを相手に聖書研究の集会を持っていたが、前述のように、突如、その集会を解散してしまう。会が成長すると、とかく他の既成教会と同じような弊害が出てくるのを彼は見抜いていたかのようなのである。

時は日露戦争の最中であつた。鑑三は「角筈の聖者」として、聖書研究に没頭し、「田舎籠り」(注、現在は副都心となった新宿角筈の地も、

当時は都心から離れた田舎と見なされていたをしていたかに見えた。が、ここに鑑三の、新たな飛躍の時が訪れる。(動き始めた内村鑑三)の感がしきりである。当時のことは既に本章の「二 日露戦争反論」で採り上げたが、鑑三は反戦論を叫び、この世と対峙した。

基督教と社会主義

『角筈バムフレット』には、その第九に『基督教と社会主義』(聖書研究社、一九〇七・二・一六)がある。それはかつて『聖書之研究』36号(一九〇三・三・二二)に載せたものを小型の書籍として刊行したものであった。そこで彼は、「私共の注目すべきことは基督教と社会主義とは両々能く相似たる所があるの、一事であります」と言う。その上で鑑三は、「然し斯う云ふて基督教は社会主義であると言ふことは出来ません、否な決して出来ません、基督教と社会主義との間には大に異なりたる点があります」とし、この主義を代表するマルクスの唯物論を問題とする。そして「基督教と社会主義」の違いを、「第一に」「第二に」「第三に」と三点に分けて説明する。簡潔にまとめよう。

第一に、キリスト教は天国の教えで、社会主義は「此世を改良するための主義」とされる。キリスト教はこの世の改良がその存在の理由ではない。第二に、キリスト教は「必しも財産の共有又は国有を唱へません」とし、それらは「皆な万物を造り給ひし神のもの」とされる。従って「田も畑も、家も、船も、鉄道も、製造所も、国家のものではなく、又社会のものでもなく、皆な神の聖物」となる。そして第三に、キリスト教は「或る一定の社会制度を定めて人をして之を採用」することはしない。キリスト教は「中より外に向て働

くもので」、社会主義などこの世の主義が「外より中に向て働く」とは全く其行動の方法を異に」するとされるのである。

日露戦争で当初義戦論を唱え、戦争を肯定した鑑三ではあったが、それが日本の帝国主義的国家欲から来るのであったことを知るに及んで、「義戦」を主張したことを深く恥じた。それ故に日露戦争に際しては、当初から非戦論に立つことになる。この時期の鑑三を検討すると、その思想は、絶対的非戦論にまで進展しているのである。後年鑑三の忠実な弟子となる矢内原忠雄を捉えた鑑三の絶対的非戦論は、この時期に生まれたものであった。

角筈時代の鑑三は、角筈聖書研究会を足場に聖書研究に没頭する。研究会は毎日曜日の午前十時から行われた。会は鑑三の祈祷にはじまり、聖句暗誦、そして鑑三の講義と続く。そこには緊張した講義空間が生じていた。四十代半ばを過ぎた鑑三には、自ずと風格が備わりつつあった。すでに述べたところだが、若き時から老成した感を伴っていた彼の風貌は、この世のさまざまな試練を経て磨かれ、鼻下の口ひげと相俟って老成した預言者を思わせるものとなっていた。彼は自分を慕う若き青年を愛した。それは次章で扱う柏木移転当初にピークを迎える。彼の信仰は多くの若き俊才を捉えて放すことがなかった。その一例は矢内原忠雄に典型的に見られることを、古賀敬太『矢内原忠雄とその時代 信仰と政治のはざま』²⁷⁾が的確に指摘している。

一九〇七(明治四〇)年四月二十一日、日曜日会に出席した志賀直哉は、当日の「日記」²⁸⁾に、「角筈、会、い、会だつた、内村先生人間の子供としての先生を知る事が出来て、涙が浮むだ、先生は情に厚い方である」と記している。この頃の鑑三は、実の弟妹から

疎んぜられていただけに、自分を慕う弟子たちに優しかった。

- 注 (1) 島田宗三『田中正造翁余録』上、三二書房、一九七二年四月二五日。新装版、二〇一三年九月二六日。下、一九七二年五月二日。新装版、二〇一三年九月二六日
- (2) 林竹二『田中正造の生涯』講談社、一九七六年七月二〇日
- (3) 由井正臣『田中正造』岩波書店(岩波文庫)、一九八四年八月二〇日
- (4) 小松 裕『田中正造 未来を紡ぐ思想家』岩波書店(岩波現代文庫)、二〇一三年七月一七日。初版は筑摩書房、一九九五年九月一五日
- (5) 内村鑑三『鉱毒地巡遊記』『萬朝報』一九〇一年四月二九日。『内村鑑三全集9』一五七ページ
- (6) 斎藤宗次郎『恩師言 内村鑑三言行録・ひとりの弟子による』教文館、一九八六年四月二〇日
- (7) 斎藤宗次郎(栗原敦・山折哲雄編)『二荊自序伝上』岩波書店、二〇〇五年三月二五日。同『二荊自序伝下』二〇〇五年六月二八日
- (8) 投稿「内村氏の鉱毒問題解決」『福音新報』三五四号、一九〇二年四月九日、『内村鑑三全集10』収録。四六八～四六九ページ
- (9) 日永康『浅田ノブの復讐問題』『内村鑑三全集37』月報37岩波書店、一九八三年一〇月二四日
- (10) 内村美代子『内村鑑三の日常生活』『内村鑑三全集21』月報21～23(三回連載)、岩波書店、一九八二年五月二四日、六月二四日、七月二三日。のち『晩年の父内村鑑三』教文館、一九八五年一月一〇日収録
- (11) 内村鑑三『戦争廃止論』『萬朝報』一九〇三年六月三〇日。『内村鑑三全集11』収録。二九六～二九七ページ
- (12) 内村鑑三「退社に際し涙香兄に贈りし覚書」『萬朝報』一九〇三年一〇二二日。『内村鑑三全集11』収録。四三二ページ
- (13) 内村鑑三「余が非戦論者となりし由来」『聖書之研究』56号、一九〇四年九月二日。『内村鑑三全集12』収録。四二二～四二六ページ
- (14) 鈴木範久編『内村鑑三選集2 非戦論』岩波書店、一九九〇年十月二十五日
- (15) 内村鑑三「平和の福音(絶対的非戦主義)」『聖書之研究』44号、一九〇三年九月一七日。『内村鑑三全集11』収録。四〇四～四〇九ページ
- (16) 内村鑑三「無教会論」『無教会』創刊号、一九〇一年三月一四日。『内村鑑三全集9』収録。七一～七三ページ
- (17) 小原信『内村鑑三の生涯 日本的キリスト教の創造』PHP文庫、一九九七年六月一六日。三六一～三六二ページ
- (18) 内村祐之『わが歩みし精神医学の道』みず書房、一九六八年九月三〇日。八ページ
- (19) 注17に同じ。三六一～三六二ページ
- (20) 関口安義『賢治童話を読む』港の人、二〇〇八年二月二四日。同『続賢治童話を読む』港の人、二〇一五年七月七日
- (21) 畔上賢造『内村先生と私』『日本聖書雑誌』5号、一九三〇年五月一日。のち『畔上賢造著作集第十二巻』収録。五三～五二四ページ
- (22) 志賀直哉「日記1、明治四十年四月十二日」『志賀直哉全集第十巻』岩波書店、一九七三年一月一九日収録。一三八ページ
- (23) 内村鑑三「余の父の信仰」『聖書之研究』88号、一九〇七年六月一〇日。『内村鑑三全集15』収録。一〇八～一〇九ページ
- (24) 内村鑑三「斎藤宗次郎宛一九〇三年九月一六日付書簡」『内村鑑三全集36』収録。五五八ページ

- (25) 内村鑑三「母を葬りて後に誌す」『聖書之研究』58号、一九〇四年
一月一七日、『内村鑑三全集12』収録。四七三ページ
- (26) ロマン・ロオラン、成瀬正一訳『トルストイ』新潮社、一九一六年
三月一八日
- (27) 古賀敬太『矢内原忠雄とその時代 信仰と政治のはさままで』風行社、二〇二二年二月一〇日、一八〜二九ページ
- (28) 志賀直哉「日記1、明治四十年四月二十一日」『志賀直哉全集第十卷』岩波書店、一九七三年一月一九日収録。二四一ページ
受領日二〇二二年九月三〇日
受理日二〇二二年一月二日